

特集1

地域の教育力で人間的発達をうながす

佐渡島の小さな学校

研究所は、それまでの10市町村を合併し、一島一市となった佐渡島について、合併による行政改革によつて、小中学校の統廃合がもたらす問題について子どもの成長・発達に関わつて地域と学校の関係がどう変わるかを中心に足かけ7年間、調査研究をすすめてきた。

とくに注目したことは、佐渡島の各地域に残る伝統芸能を地域の子どもに継承するという活動に多くの学校が協力していることである。子どもが地域の伝統芸能を学ぶことが、他では得られない人間的な成長・発達に深く関わつているという事実である。

今、全国の小中学校は、新自由主義の競争主義下で学力テスト体制に組み込まれ、子どもたちは、テストの点数に追い立てられている。中島哲彦氏（名古屋大学）は、こうした「排他的競争意識に支

えられた学習・教育からは、知と文化を獲得し人間的成長を達するという学習・教育の本質が脱落してしまふ」と指摘する（雑誌『教育』11年3月刊）。

これまでの「ゆとりの時間」を削減した、この4月から実施の新学習指導要領は、「国際的な学習到達度調査でつねに世界トップレベルに」という「新成長戦略」に彩られた「教育版」といつてさしつかえないだろう。

小中学校の統廃合をすすめる理由に「切磋琢磨」ということばを使い、小さな学校の教育環境の見劣りを教育行政は指摘し、保護者を統合に駆り立てる。果たして小さな学校は、子どもにとって、教育的機能を損なつているのか。改めて、佐渡島における地域の小さな学校で子どもたちが学ぶ大きな意義を探求したい。

編集部